

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Cat and Dog Ownership in Early Life and Infant Development: A Prospective Birth Cohort Study of Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 生後早期のペットの飼育と子どもの発達

ユニットセンター(UC)等名: 北海道UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: International Journal of Environmental Research and Public Health

年: 2020 月: 卷: 17(1) 頁: 205

筆頭著者名: 湊屋街子

所属UC名: 北海道UC

目的: 本研究の目的は、生後早期の猫、犬の飼育状況と子どもの発達の間接的な関係を検討することである。

方法: 日本の出生コホートを用いて、生後6か月の猫、犬の飼育状況と12か月の子どもの発達について検討した。子どもの発達の評価にはASQ-3を用い、ペットの飼育状況は6か月の質問票より入手した。両方の情報がそろった78,868名について解析した。

結果: 犬の飼育があった子どもでは、犬の飼育がなかった子どもと比べて、ASQ-3のすべての項目(コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会)において、発達の遅れのリスクが有意に低かった。猫の飼育との関連はみられなかった。

考察: (研究の限界を含める) 先行研究と同様に、犬の飼育は精神発達にプラスの影響がある可能性が示された。これは犬とのふれあいが、発達により何らかの効果がある可能性を示唆した。しかしながら、犬の飼育については、アレルギー、感染症、ケガなどマイナスの影響も考慮する必要がある。

結論: 本研究から、生後早期の犬の飼育は、子どもの発達に良い影響を与える可能性が示唆された。